

「5館連携を活用して、国内外から注目されるようなACCを発信していきたい。それぞれの強みを生かしながら『アート県青森』をPRしていきたい」

国際芸術センター青森（ACC）を所管する青森公立大学の石川浩明理事長は期待を語る。ACCは2020年に発足した県内公立美術施設5館の連携プロジェクト

## 6 5館連携で注目

# 新たな価値観生む場に

に参画。県立美術館（青森市）、十和田市現代美術館、弘前れんが倉庫美術館、八戸市美術館とともに共通のサイトで情報発信し、5館を周遊できるようアピールしている。

本県は現代美術を扱う美術施設がそろった「アート県」として全国的に注目を集めており、プロ

とができた。作る過程でボランティアとして参加することもできる。美術館とは別の楽しみ方を知ってもらいたい」と話す。

5館連携では各館で「建築」を切り口にしたPRに取り組んでいる。安藤忠雄さんが手掛けたACCの建築も改めて

川理事長は「専門知識のある学芸員がおり、大学の一部としての運営という点に関して言えば、館長がいなくても運営できている」と説明する。

ACCの元学芸員で東京芸術大学大学院准教授の服部浩之さんは「ACCはローカルでありつつインターナショナルの形式を変更。成果展示を必須とせず、滞在期間は2週間から3カ月まで選べるようにした。郵送のみだった応募方法もネットでも可能にしたところ、近年150件程度だった応募が1679件と10倍に増えた。

コロナ禍で海外作家の来日が難しくなったことを受け、本年度はリモートでのレジデンス枠を設けた。学芸員が作家の代わりに地元の人に取材するなどリサーチを手伝い、オンラインで対話を重ねて共に作品を作り上げる。慶野さんは「作家は青森のことを知りたくない。直接来られたら一番いいけれど、リモートの可能性も探っていく」と話す。

上で、工芸美術作家の遠藤薫さんらが参加した「いのちの裂け目展20年」、彫刻家・評論家の小田原のどかさんの個展（21、22年）を挙げ「非常に興味深い展示が続き、うれしい驚きを感じている。こうした方向を続けられれば、新たな価値観を生み出せる貴重な場になると思う」と語る。

プロジェクトが始まって以降、ACCでも美術雑誌などの取材が増えたほか、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いていた昨春秋ごろには首都圏などからの団体観光客が5、6組訪れたという。

注目をされているが、築20年が過ぎ老朽化も進む。石川理事長は改修について「市と相談しながら計画的に進めていく」と話した。

ACCの学芸員は現在、慶野結香さん（32）、村上綾さん（31）の2人。時代のニーズに応じた新たな挑戦を続けている。20年度には公募アーティスト・イン・レジデンス

ACCの学芸員は現在ACCの学芸員を務める村上さん（32）と慶野さん。作家の作品について文章化し、カタログに残すことにも力を入れている。

注目をされているが、築20年が過ぎ老朽化も進む。石川理事長は改修について「市と相談しながら計画的に進めていく」と話した。

ACCの学芸員は現在、慶野結香さん（32）、村上綾さん（31）の2人。時代のニーズに応じた新たな挑戦を続けている。20年度には公募アーティスト・イン・レジデンス

ACCの学芸員は現在ACCの学芸員を務める村上さん（32）と慶野さん。作家の作品について文章化し、カタログに残すことにも力を入れている。

ACCの学芸員は現在ACCの学芸員を務める村上さん（32）と慶野さん。作家の作品について文章化し、カタログに残すことにも力を入れている。



（大友麻紗子）  
〓 終わり〓